



【キーワード】 医療サービスのあり方

団塊の世代に選ばれる 医療サービスのあり方を考える

団塊の世代が75歳以上を超える2025年まであと1年半になりました。どのようなサービスを提供すれば、この世代から選んでもらえるのでしょうか。今回は、今後の医療ニーズの中心となる団塊の世代が考える健康や医療に対する意識を把握しながら、選ばれるための医療サービスのあり方を考えます。

団塊の世代に選ばれるには まず相手を知ることが大切

団塊の世代とは、第一次ベビーブームの時期(1947～49年)に生まれた人たちで、その数は、全国で約700万人にのぼります。1951年生まれまでを含めた広義の団塊の世代となると、およそ1000万人となり、医療機関にとっては非常に大きなマーケットになります。

しかしながら、すべての医療機関において患者さんが増えていくというわけではありません。団塊の世代以降は、インターネット等を使って、自分が求める医療サービスを受けられる医療機関を選別することが定着しています。

また、「患者さま」としての権利意識が高く、「先生にすべてお願いします」という一昔前の“おとなしい高齢者”というイメージはありません。自分の困り事や症状をはっきりと言葉にするため、問診はしやすいという面はありますが、接遇を含めて対応を間違えるとすぐにクレームに発展してしまう可能性が高くなります。

たとえば、インターネットで入手した間違った情報を信じ込んでいる場合などは、聞き流しながら正しい情報を伝えるといった対応が得策です。いわゆる“上から目線”で頭ごなしに否定するのは厳禁です。

このように、団塊の世代に選ばれる医療機関となるには、この世代の特性やニーズ等を把握したうえで、それに応える医療サービスを提供するとともに、団塊の世代に刺さる広報・PRを行う必要があります。

70代気になる症状上位は がん、筋力低下、歯の衰え

まず、団塊の世代の健康に関する意識を把握しましょう。

人生100年時代未来ビジョン研究所が2020年6月と2021年3月に行ったインターネット調査によると、70代の回答は「いまの自分は健康だ」と回答した人は68.2%だった一方で、「健康不安を感じる」と答えた人は71.2%でした。さらに、「健康を維持して今の暮らしを保ちたい」と考えている人は96.4%でした。

次に、現在持っている病気や症状については、「高血圧(35.0%)」がトッ

プで、そのほか、「腰痛(25.1%)」「歯の衰え(23.4%)」「ひざ痛(18.7%)」「中性脂肪・コレステロール(16.7%)」「筋力低下(15.7%)」「白内障(13.5%)」などが挙がっていました。

一方で、「症状はないものの気になっていること」としては「筋力低下(50.0%)」を頂点として、「がん(44.6%)」「歯の衰え(45.5%)」「疲労(42.3%)」「中性脂肪・コレステロール(36.9%)」が上位を占めました。また、他の世代では少なかった「白内障(35.8%)」「尿漏れ(31.8%)」を気にしている人も多いようです。

これらの数字から、大半の人は「自分は健康だ」と思いつつも、将来の健康に不安を持っていることがわかります。では、健康を維持するためにどのようなことを行っているのでしょうか。

これに関しては、91.0%の人が「要介護状態」にならないための取り組みを行っているという回答。具体的な内容としては、最も多かったのが「定期健康診断を受ける(60.5%)」で、半数以上が「散歩(59.7%)」「適度な運動(56.7%)」を行っていることがわかりました。健診や運動な

ど、やはり、予防領域に対する関心が高いようです。

同研究所が2022年3月に行った調査によると、70代の90.4%が「何歳になっても若々しく、前向きな意識を保ち続ける大人でありたい」、80.7%が「何歳になっても若々しい見た目でありたい」と回答するなど、団塊の世代を中心に、高齢者のアンチエイジングに対する意識の高さがうかがえます。

健康長寿に向けた フレイル予防と対策

団塊の世代が求める健康長寿に医療機関はどのように応えることができるのでしょうか。

1つは、ロコモティブシンドロームやサルコペニア、フレイル(図表)を予防するための専門外来です。

最近では「フレイル外来」等の名称で、薬物療法、食事療法、運動療法、心理療法などを組み合わせた治療を行っている医療機関は増えてきています。保険診療以外の分野では、フレイル健診や食支援・運動支援サービスなどのニーズも大きくなるのが予想されます。

フレイル対策というと、内科を中心にしたかかりつけ医や整形外科がイメージされますが、最近では、オーラルフレイルやヒアリングフレイル、アイフレイルなど、専門分野別の機能低下とその対応もクローズアップされるようになっており、今後、専門診療所においてもその対策が求められるようになると考えられます。

また、フレイル予防には主に栄養、身体活動、社会参加の3つが

大事となるため、専門外来のほか、暮らしの保健室や健康イベントなどの地域活動、就労・社会参画支援サービスなどを通じて地域住民をつなげるような取り組みも重要になります。

直接的な収益にはなりませんが、これらをきっかけに信頼関係が生まれて受診につながるなど、団塊の世代の支持を集めるうえで、効果的な取り組みといえます。

75歳以上が気にする 認知症予防とリスク軽減

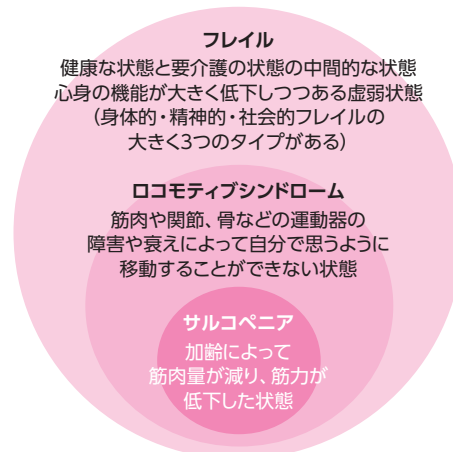
75歳を超えるとどうしても気になるのが認知症です。そのため、認知症のリスク要因である脳の疾患や異常の早期発見につなげるための脳ドックや、認知症や軽度認知障害の早期発見はもちろん、発症予防や症状進行等の予防等を行う「もの忘れ外来」「認知症予防外来」といった専門外来などのニーズは大きくなるはずで

す。認知症予防としては、認知症リスクの低減につながるトレーニングやゲーム、コグニサイズなどへの関心も高まっています。また、認知症患者さんへの支援はもちろん、団塊の世代を含めた地域住民に対するブランディングという観点から、認知症カフェの開設も検討する価値があります。

団塊の世代が求める かかりつけ医の価値

「いつまでも若々しくありたい」という団塊の世代の希望に応えるための抗加齢医療も有用でしょう。

図表 フレイルの概念図



最近では、保険診療を中心にしながら、かかりつけ患者を対象とした抗加齢医療を行う診療所も増えてきています。

75歳を超えると多臓器にわたって疾患を抱える人が増えるうえ、健康に対する不安も持っています。

それだけに、総合的に診療してもらえるだけでなく、健康に関する不安や問題について、ワンストップで「何でも相談できる」かかりつけ医に対するニーズは大きくなります。「寒い時期になると膝が痛くなるけど放置していいのか、すぐに受診すべきか」といった相談にアドバイスをくれる——。これは、団塊の世代にとって非常に大きな価値といえます。包括的に診てもらえるという観点から、複数の専門医によるグループプラクティスの実践も魅力です。

団塊の世代にとって「健康寿命」「何でも相談できる」「ホームドクター」は医療機関を選択する際のキーワードの1つです。WEBサイトのトップページを含めて、広報やPRにうまく活用することをおすすめします。